

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

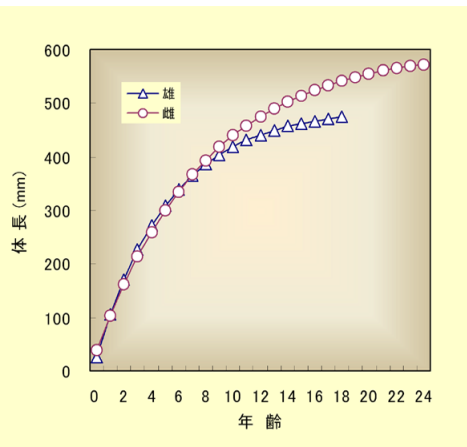
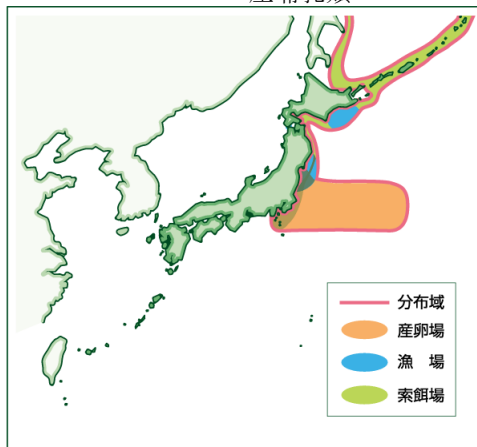
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄18歳、雌24歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳、雌7歳程度
産卵期・産卵場: 2～4月、本州関東・東北南部沿岸～本州東方の外洋域
索餌期・索餌場: 周年、本州関東沿岸以北の陸棚斜面域(水深300～1,500m)
食性: オキアミ類やカイアシ類などの甲殻類およびハダカイワシ科魚類など
捕食者: ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラなどの海産哺乳類

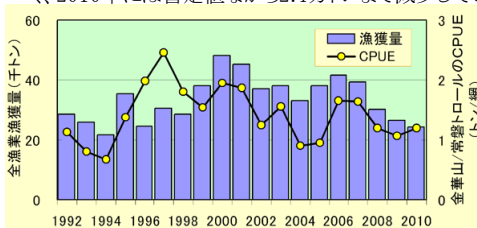


漁業の特徴

主に沖合底びき網漁業によって漁獲されており、1990年代以降に主対象魚として漁獲されるようになった。スケトウダラの代替で練り製品の原料として利用されており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。また、ロシアに対し日本水域内における漁獲量が割り当てられている。2000年以降の漁獲量は日本船よりもロシア船の方が多い。

漁獲の動向

近年の日ロ両国の漁船による漁獲量は1995年の3.5万トン以降増加し、2000年には4.8万トンと過去最高を記録した。その後2005年には3.8万トン、2006年には4.1万トン、2007年には3.9万トンとなった。2008年には3万トンと少なく、2010年には暫定値ながら2.4万トンまで減少している。

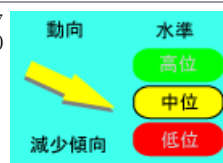
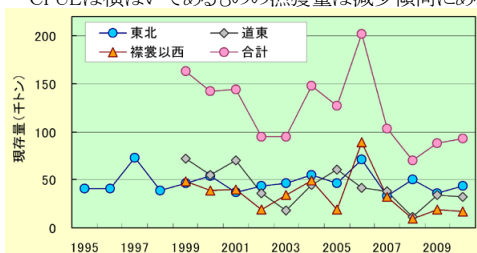


資源評価法

東北および北海道の太平洋側の陸棚斜面域において、主な分布水深帯である水深350～900mで実施した着底トロール調査の結果を基に、面積密度法により現存量を算出した。イトヒキダラは海底から離れた水域にも分布することから、着底トロール調査で得られた現存量は、資源量の指標値として用いた。

資源状態

東北海域と北海道太平洋岸におけるトロール調査結果によると、最近12年間の現存量は7万～20.2万トンで推移していた。2008年の現存量は過去11年で最も少ない7万トン、2010年には9.3万トンとなり、やや増加していた。2010年の現存量、金華山海区と常磐海区の沖底CPUE、およびロシア船のCPUEにおける平均値に対する割合から、資源水準は中位と判断した。また、最近5年間の現存量および沖底CPUEが減少していること、ロシア船のCPUEは横ばいであるものの漁獲量は減少傾向にあることから、動向は減少とした。



管理方策

資源は複数年に一度発生する加入により支えられている。成長が遅く比較的長寿であるため、一度親魚が減少すると回復が困難であることから、親魚量の維持を管理目標とした。北海道および東北太平洋岸で行っているトロール調査

から現存量を推定し、その現存量の変動から変化率をもとめ、変化率と資源の水準から求めた係数に過去5年間の平均漁獲量を乗じてABCを算出した。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	23千トン	0.72Cave5-yr	—	—
ABCtarget	19千トン	0.8・0.72Cave5-yr	—	—

- ABCは1,000トン未満で四捨五入した値

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少傾向にある
- 若齢魚の発生には大きな年変化がある
- 資源状態は比較的安定していたが、近年減少傾向が見られる

管理方策のまとめ

- 成長が遅く、成熟年齢も比較的高齢であるため、親魚量を維持する必要がある
- 若齢魚を含めた今後の資源動向を注視することが必要である

執筆者: 成松庸二・伊藤正木・服部 努

資源評価は毎年更新されます。